耳原遺跡の建物群・馬埋葬土坑・硯

－殖村駅比定地をめぐって－

富田 卓見

１．はじめに

茨木市は大阪府北部に位置し、その市域は古代においては摂津国島下郡に属していた。『続日本紀』に「和銅四年（711 年）正月丁未　始置都亭駅（中略）摂津国島上郡大原駅　島下郡殖村駅（後略）」とあるように、島下郡を通っていたとされる古代山陽道（註１）に殖村駅を置いた記述が見られる。駅家は、古代官道に 30 里（約 16km）ごとに設置され、官道ごとに定められた頭数の馬が置かれた施設である。その役割は、情報の伝達や租税の運輸の他、国司の利用や海外からの蕃客をもてなすための施設だったと考えられている。時代を経ると、船による移動が増加するとともに衰退し、11 世紀前半頃にはその機能は失われたようである（註２、高橋 2005）。

前述の「殖村駅」の名は、『続日本紀』以外の文献史料では確認されておらず、唯一の記述である。このため不明な点が多く、所在地については古くから検討がなされている。難波宮から北へのびる三嶋路と西国街道とが合流する中河原付近（直木 1980）、西国街道沿いの太田から幣久良山にかけての範囲（足利 1985）、塔心礎内から舎利容器がみつかった古代寺院である太田廃寺跡の西方で、安威川右岸段丘上付近（高橋 1995）、三嶋路と古代山陽道の接点で古代の遺構を多く確認している郡・上穂積周辺（鈴木・濱野 2002）など

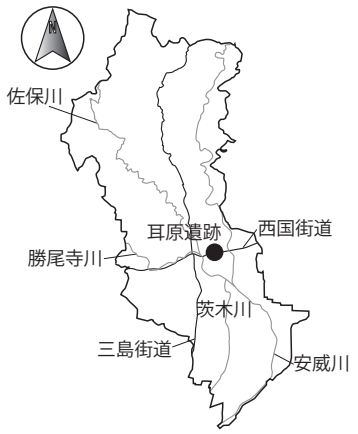

図１　遺跡位置図

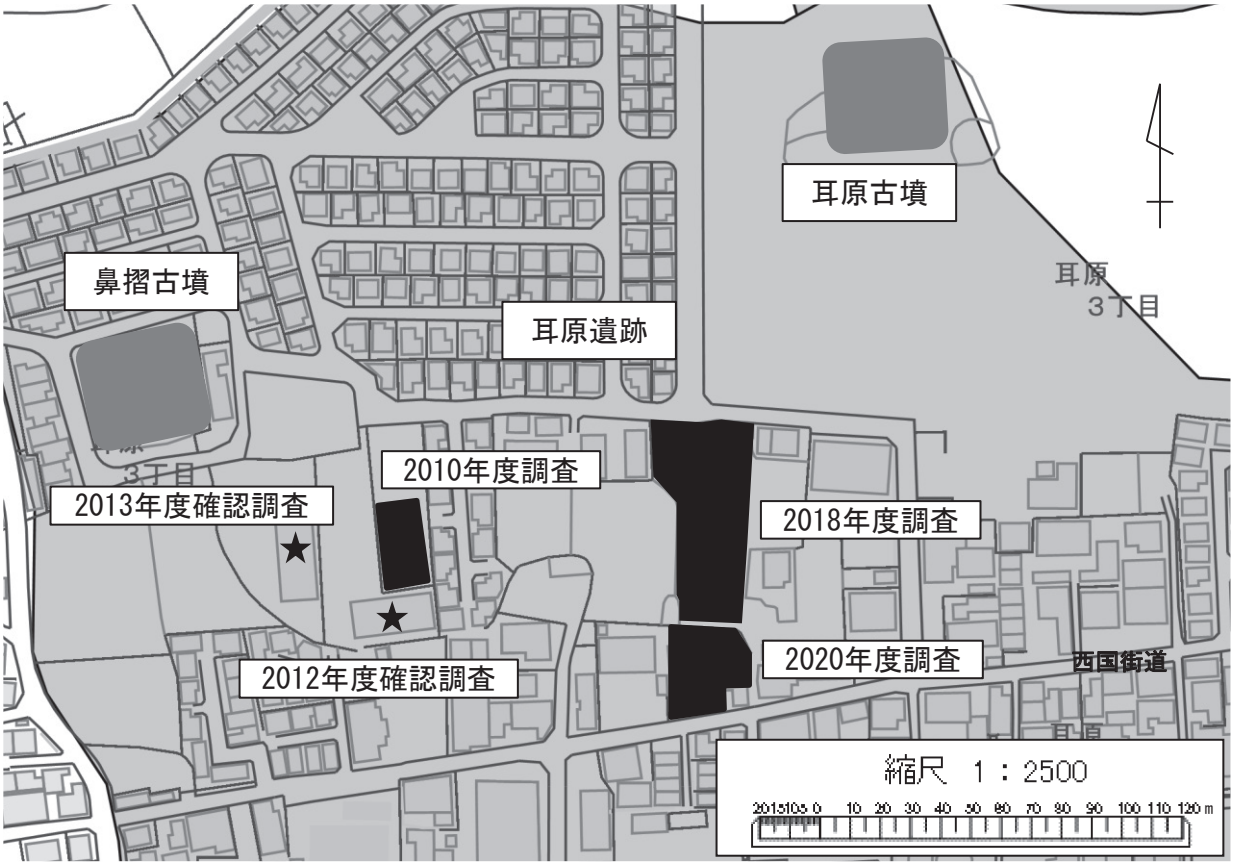

図２　耳原遺跡 調査地位置図

諸説が挙がっているものの、確定には至っていない。

遺跡内の中央を東西に西国街道が通る耳原遺跡（図１）は、上記の足利健亮による推定地付近に位置し、近年注目すべき発掘調査成果が得られた。現在整理作業中であるが、古代の耳原遺跡を考えるうえで重要な知見であるため、本稿では現段階で判明している成果を紹介したい。

２．耳原遺跡の調査成果

本稿で紹介するのは、茨木市教育委員会が実施した 2018・2020 年度発掘調査を中心に、その近辺にて実施した 2010 年度調査、2012・2013 年度確認調査である。特に南北に隣接している 2018・2020 年度調査では、一連の遺構と考えられる成果が得られた。以下、年度ごとにみていく。

2.1　2018 年度の調査について

調査地は、耳原古墳の南約 130 ｍに位置し、2020 年度調査地に北接する（図２）。調査は、調査地内の中央に南北にのびる約 283 ㎡の調査区を設定し、実施した。調査の結果、古代から中世にかけての遺構や遺物が多く認められた。遺構数は、およそ 180 基である。その中で目を引くものとして、調査区中央部から北部の範囲にかけて検出した建物群と、中央部で検出した柱列・土坑が挙げられる（図３）。建物群の内訳は、掘立柱建物が３棟で、概ね南北方向に連なって建てられていた（写真１、註３）。

173 ～ 175 掘立柱建物　建物３棟の中で南に位置する 173 掘立柱建物は、２間以上×４間（3.0 ｍ以上× 6.0 ｍ）の総柱建物である（写真２）。柱穴は１辺 0.5 ～ 1.0 ｍ・深さ 0.1 ～ 0.4 ｍ程度、平面形は丸みをもつ隅丸方形を呈する。柱間距離約 1.5 ｍを測る。

建物３棟の中で中央に位置する 174 掘立柱建物は、２間×３間（4.2 ｍ× 4.5 ｍ）の総柱建物である（写真３）。柱穴は１辺 0.7 ～ 0.9 ｍ・深さ 0.19 ～ 0.47 ｍ程度、平面形は隅丸方形を呈する。柱間距離は、梁が約 2.1 ｍ・桁が約 1.5 ｍを測る。

建物３棟の中で北に位置する 175 掘立柱建物は、３間×３間（4.8 ｍ× 4.4 ｍ）の総柱建物である（写真４）。柱穴は１辺 0.5 ～ 0.9 ｍ・深さ 0.15 ～ 0.46 ｍ程度を測り、平面形は隅丸方形を呈する。柱間距離は 1.5 ｍ前後を測る。

これら３棟の建物は総柱建物であることから、倉庫として利用していたと考えられる。

172 柱列　調査区中央部にて検出した（写真５）。173 掘立柱建物南辺から南へ約 8.5 ｍの地点で、３基のピットが東西方向にならぶ。この柱列は掘立柱建物を構成する柱穴の一部である可能性もあるが、近辺に同一の建物を構成するような柱穴が認められなかったため、柱列と判断した。柱穴は、１辺 0.58 ～ 0.85 ｍ・深さ 0.39 ～ 0.56 ｍを測り、平面形は隅丸方形を呈する。柱間距離は約 1.5 ｍを測る。遺構内から遺物は認められなかった。

71 土坑　調査区中央部に位置する。遺構の規模は 1.74 ｍ× 2.72 ｍ・深さ 0.16 ｍを測り、平面形は南北に長い歪な隅丸長方形を呈する。遺構内にて、顎骨・馬歯を検出した。わずかに確認できる他部位の骨や遺構の規模から馬１頭分と考えられ、馬の埋葬土坑と判断できる。顎骨・馬歯は一部残存している（写真７）が、他の骨部位については土壌化が進行しており、わずかに痕跡は認められるものの、取り上げはできないほどに遺存状態は不良である。顎骨・馬歯は、遺構内の南端で検出した。顎骨・馬歯以外の遺物は、時期特定が困難な土師器細片が僅少である。なお、71 土坑は 173 掘立柱建物の柱穴と一部重複しており、検出状況や遺構土層断面観察から、173 掘立柱建物より古い時期のものと推測される。

2.2　2020 年度の調査について

調査地は、耳原古墳から南へ約 190 ｍに位置し、北は 2018 年度調査地、南は西国街道とそれぞれ接する（図２）。調査は、調査地内の中央で南北にのびる約 86 ㎡の調査区を設定し、実施した。調査の結果、古代から中世にかけての遺物や遺構が認められた。検出した遺構数は、およそ 100 基である。その中で、注目すべき遺構である掘立柱建物について述べる（図３）。

99・100 掘立柱建物　調査区中央部で検出した 99 掘立柱建物は、２間×４間（3.6 ｍ× 7.2 ｍ）の総柱建物である（写真６）。柱穴は、１辺 0.8 ～ 1.12 ｍ・深さ 0.3 ～ 0.5 ｍ程度を測り、平面形は隅丸方形を呈する。柱間距離は、約 1.8 ｍを測る。建物の北から２列目の柱穴は、後世の大溝によって消失している。柱穴内からは、時期特定が困難な土師器・須恵器の細片が認められた。

調査区北端部にて確認した 100 掘立柱建物は、

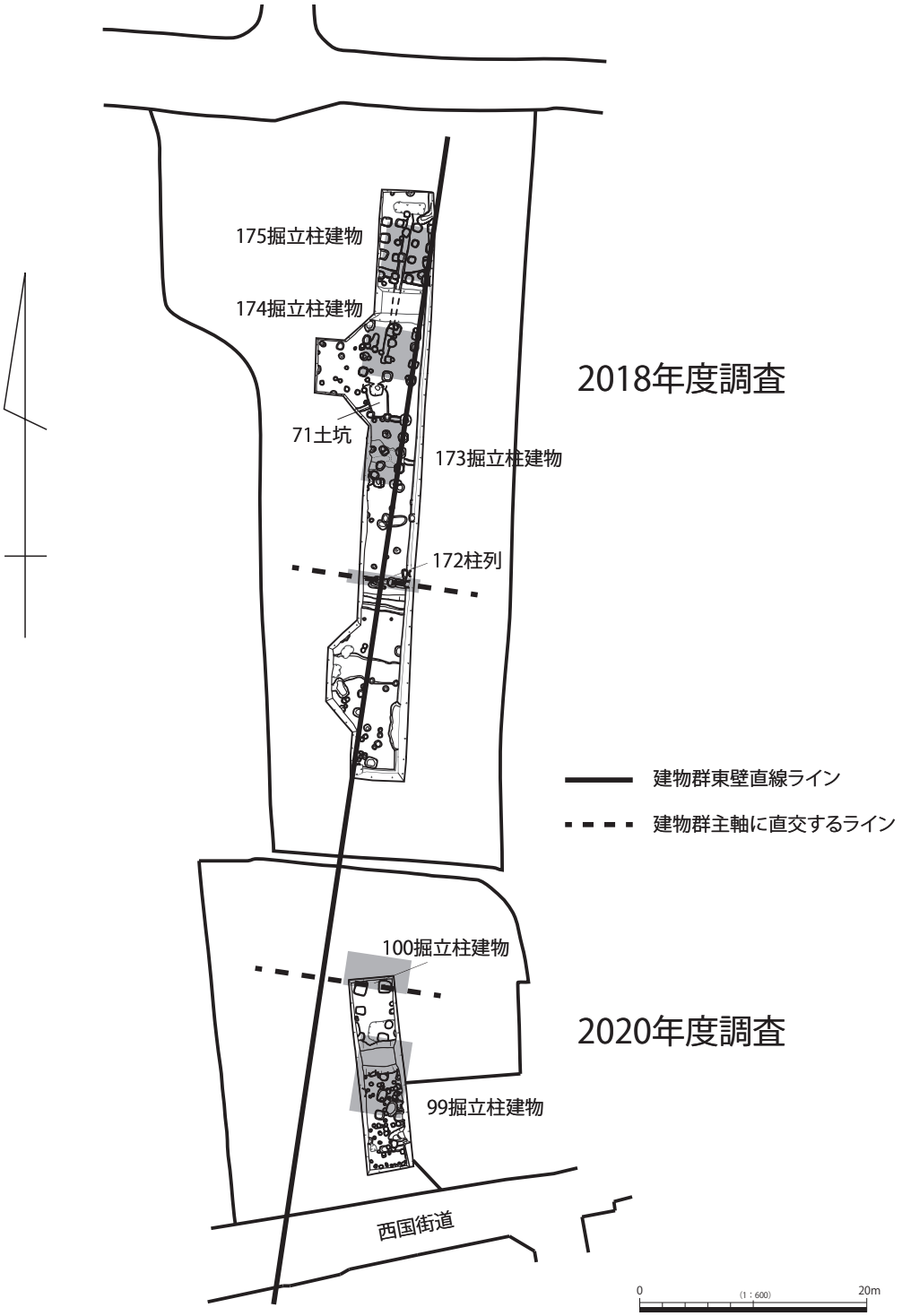

図３　2018 年度・2020 年度調査 遺構平面図

99 掘立柱建物北辺から北へ約 3.5 ｍに位置し、２基のピットが東西方向にならんでいる（写真８）。柱穴は、１辺 1.05 ～ 1.34 ｍ・深さ 0.41 ～ 0.45 ｍ程度を測り、平面形は隅丸方形を呈する。柱間距離は、約 2.1 ｍを測る。掘立柱建物を構成する柱穴の一部である可能性が高く、他柱穴は調査区外にあると推測される。なお、調査時は柱列と呼称した。遺物は、柱穴内より土師器・須恵器の細片が認められた。

2.3　その他の調査について

2010 年度の調査　調査地は、2018 年度調査地から西へ約 100 ｍ、鼻摺古墳から南東約 100 ｍの地点に位置する（図２）。発掘調査は、敷地内に約 260 ㎡の調査区を設定し実施した。資料整理中のため、調査成果については現時点で注目すべき成果のみを記す。

調査の結果、調査区南部にて柱列を確認した。柱列は４基の柱穴で構成され、列の向きは東西方

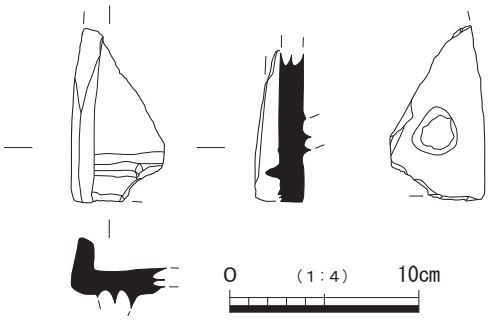

図４　2012 年度確認調査 出土硯片（木村 2017）

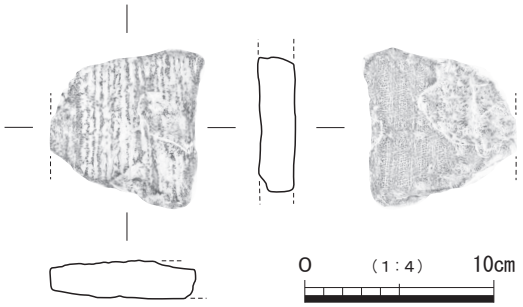

図５　2013 年度確認調査 出土瓦片

向、真北に対しおよそ 81.5°西偏する。柱穴は１辺 0.8 ～ 1.05 m・深さ 0.15 ～ 0.45 m程度を測り、平面形は丸みをもつ隅丸方形を呈する。柱間距離は、約 2.1 mを測る。

2012 年度の確認調査　2020 年度調査地より西へ約 105 mの位置で、前述の 2010 年度調査地の南隣地にて確認調査を実施した（図２）。

確認調査の結果、遺構面直上の土壌化層（遺物包含層）内より、須恵器硯片を確認した（図４、写真９）。遺物は、残存長 9.0cm・残存幅 4.8cmを測る。硯片は風字硯の一部と考えられ、裏側に足の痕跡､硯尻に断面三角形の突帯状の堤をもつ。時期は９～ 10 世紀頃と思われる（木村 2017）。

2013 年度の確認調査　2018 年度発掘調査地より西へ約 140 mの位置で、前述した 2012 年度確認調査地の西隣地にて確認調査を実施した（図２）。

確認調査の結果、遺構面直上の土壌化層（遺物包含層）内より、瓦片を確認した（図５、写真 10）。瓦片は、残存長 8.5cm・残存幅 7.7cm・厚さ 1.9cmを測る。凸面は縦方向の縄目、凹面は布目の調整痕がみられる。

３．調査成果の検討

上述の調査成果を踏まえ、一般的な古代集落とは異なる耳原遺跡の様相について検討する。建物・柱列、馬埋葬土坑、遺物の順にみていきたい（図３）。

建物・柱列　まず、173 ～ 175 掘立柱建物の配置に注目したい。これらの建物は、それぞれ３m前後の間隔に在る。また、各建物で柱の配置に違いはみられるものの、柱穴や建物の規模に大きな差異はみられず同程度である。そして、３棟の建物主軸は同じ方位であり、且つ、各建物の東壁に使われている柱穴が直線上にならび、整然と配置され建てられている状況が認められた。建物主軸の傾きは、真北に対しおよそ 8.5°東偏している。この建物群の南方で検出した 172 柱列についても、建物群の主軸方位に対し直交してつくられていることがわかった。2020 年度調査の 99 掘立柱建物の建物主軸も、2018 年度調査の建物群の建物主軸とほぼ同じ方位で建てられていることが判明した。100 掘立柱建物も、建物群の主軸方位にほぼ直交している。2010 年度調査で検出した柱列も、建物群の主軸方位にほぼ直交する傾きであるとみられる。

以上の状況から、各調査で検出した建物・柱列は、ほぼ同じ方位にそろえ、規則性をもって配置されている可能性が高いことがわかった。

建物の時期については、各柱穴からの遺物は土師器・須恵器の細片のみで、時期特定が可能な遺物は認められないものの、遺物の種類や柱穴の様相から､古代の範疇におさまるものと推測される。

馬埋葬土坑　2018 年度調査で確認した 71 土坑である。これまでの調査で確認したのはこの１基で、近隣の調査でも馬関連の資料はみつかっていない。このため、馬匹生産なのか、馬匹飼育もしくは利用なのか判断が難しい。ただ、耳原遺跡内に古代山陽道が通っていたとされることを踏まえると、後者の飼育・利用といった消費遺跡であった可能性の方が高いと考える。茨木市域での他調査の事例としては、耳原の南約 1.5km に位置し、昭和 48 年（1973 年）に郡遺跡で実施した調査で検出した馬の埋葬土坑２例が挙げられる（茨木市 2014）。両土坑内には馬歯が認められ、頭位はそれぞれ南・北に向いていたようである。なお、郡遺跡は古代の官衙である島下郡衙の所在地と目さ

れている遺跡である。

遺物　2012年度確認調査でみつかった須恵器硯片は、これを使用していたと考えられる有力者や公的施設の役人、寺社関係者などの識字層が、当該地に居た証左と捉えられる。2013年度確認調査でみつかった瓦片についても、調査地近辺に古代頃の瓦葺構造物が在った可能性を示唆するものと考えたい。

４．まとめ

本稿では、足利が想定する「殖村駅」推定地付近に位置する耳原遺跡で実施した発掘調査成果について紹介した。調査によって、方位をそろえた構造物を計画的に配置することができる組織、馬・識字層の人々・瓦葺構造物の存在が示唆され、一般的な古代の集落とは様相が異なることが明らかとなった。

今回紹介した調査成果は、殖村駅の比定に即するものではない。駅家の比定には、まず駅名等が書かれた文字史料の検出は不可欠であろう。また、計画的に配置された建物や築地塀・道路などの遺構とその配置、当該期の瓦や硯といった古代の一般的な集落ではあまり見られない遺物、周辺環境や立地、小字名なども要素となり得る。本稿では比定には至らなかったが、殖村駅推定地の一つである耳原遺跡にて今回紹介した遺構・遺物が見つかったことは、近年停滞していた殖村駅の比定について、検討材料となり得るような新たな考古資料が得られたという点で注目すべき成果と言える。

註

１）本稿では、近世以降で現在も使用されている道路を「西国街道」、古代に耳原周辺を通っていたとされる官道を「古代山陽道」と呼称している。

２）高橋美久二氏は『本朝法華験記』の説話を採り上げ、11世紀の駅制の衰退ぶりを示す史料として挙げている（高橋2005）。

３）2018年度調査については、大阪府立近つ飛鳥博物館で開催された「令和元年度冬季企画展　歴史発掘おおさか2019」で、パネル展示にて成果を報告している。

参考文献（五十音順）

足利健亮　1985「摂津を東西に貫いた計画山陽道の復原」『日本古代地理研究』　大明堂　pp. 179-191

伊藤純　1992「風字硯をめぐるいくつかの問題－考古資料と伝世品－」『ヒストリア』第135号　大阪歴史学会　pp. 73-88

茨木市　2012『新修 茨木市史』第１巻 通史Ⅰ

茨木市　2014『新修 茨木市史』第７巻 資料編 考古

茨木市・茨木市教育委員会　1992『わがまち茨木－街道編－』

茨木市・茨木市教育委員会　2007『わがまち茨木－年代誌編－』

上郡町教育委員会　2005『落地遺跡（八反坪地区）』上郡町文化財調査報告３

上郡町教育委員会　2006『古代山陽道　野磨駅家跡』上郡町文化財調査報告４

木村健明　2017「茨木市内出土の文字関係資料について」『茨木市立文化財資料館　館報』第２号　茨木市立文化財資料館　pp. 24-29

鈴木雅美・濱野俊一　2002「摂津国嶋下郡における地方官衙遺跡についての一考察」『大阪文化財研究』第21号　財団法人大阪府文化財調査研究センター　pp. 28-34

高橋美久二　1995「山城・摂津の駅と駅路」『古代交通の考古地理』　大明堂　pp. 55-69

高橋美久二　2005「落地遺跡（野磨駅家）と古代の山陽道」『落地遺跡（八反坪地区）』上郡町文化財調査報告３　上郡町教育委員会　pp. 96-108

高村勇士　2020「島下郡殖村駅家を考えるために－畿内の駅家と35疋の駅馬－」『茨木市立文化財資料館館報』第５号　茨木市立文化財資料館　pp. 14-20

龍野市教育委員会　1992『布勢駅家』

龍野市教育委員会　1993『布勢駅家Ⅱ』

富田卓見　2020「耳原遺跡」『令和元年度冬季企画展 歴史発掘おおさか2019』大阪府立近つ飛鳥博物館　p. 30

直木孝次郎　1971「平城遷都と駅の新設」『続日本紀研究』、のち1980『飛鳥奈良時代の研究』　塙書房　pp. 512-515

別府洋二　2002「駅家の構造と機能－小犬丸遺跡（布勢駅家）の再検討を通じて－」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第２号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所　pp. 79-92

写真１　掘立柱建物群（南西から）

写真２　173 掘立柱建物（南から）

写真３　174 掘立柱建物（南から）

写真４　175 掘立柱建物（南から）

写真５　172 柱列（南から）

写真６　99 掘立柱建物（北から）

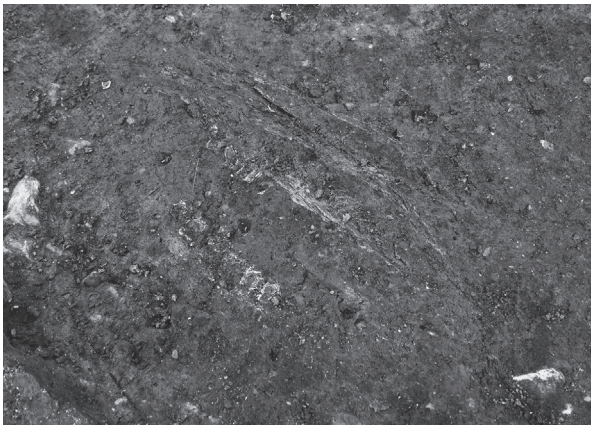

写真７　71 土坑 顎骨・馬歯 検出状況（南から）

写真８　100 掘立柱建物（南から）

写真９　2012 年度確認調査 出土硯片

写真 10　2013 年度確認調査 出土瓦片